

地震誘発リスクがあり、新たな課題の克服を迫られています。「シエールガ革命」と言われている一方で、水質、大気汚染、入の採掘技術が確立されたことにより、価格は大幅に下落し、火力電力の燃料の多くを占める天然ガスはシエールガとして、発電効率を上げています。

天然ガス(LNG)を燃やした熱を再利用(コジェネレーション)れます。最新のガスコンソリドサトル発電(GCC)では、設備に置き換えていくことで、その放出量はかなり抑えられ、CO₂の問題は、現在の火力発電所を新しく、火力のフットとして、大気中のCO₂放出、燃料費な力発電していた分を火力で十分補うことができている。



原発がすべて止まると、現在の日本の電力の90%が「火力発電」でまかなわれています。「原発を全部止めたら電気が足りなくなる」と2~3年前までよく言われていたましたが、実際には原子力発電は、火力発電の10%程度しかありません。

GCCなど、新技術で環境負荷を低減。LNGも大幅に値下がり。

火力発電



バイオマス



薪を燃やしてもCO₂は増えない！
バイオマス資源の活用法。

「バイオマス」とは、木材やメタンガス、エタノールなど、化石燃料以外の有機物資源のことを言います。化石燃料との大きな違いは、バイオマスを燃やしても地球上のCO₂は全体として増えないことです。なぜなら、そのCO₂を植物がまた吸収し、そうして成長した植物があらたなバイオマス資源となるからです(これをカーボン・ニュートラルといいます)。

バイオマスでは発電もできますが、もっとも知られているのは薪ストーブや薪ボイラーの燃料としての利用です。これまで林業ではあまり利用価値がないとみなされていた間伐材を山からおろし、薪や木質チップに加工することによって、地域の暖房を化石燃料からバイオマス燃料へと移行できます。またそれによって林業が活性化し、地域が潤います。



「エネルギー革命」はもうはじまっている。日本で動いている原発は30基(2015年5月現在)。原発でつくられた電気を全く使わずに、私たちは生活できています。経産省のデータによれば、石油はあと約40年分、天然ガスは60年分、石炭は160年分ほど採れるとされ、当面は環境に配慮しながら化石燃料を用いつつ、段階的に再生可能エネルギーへ移行する事が可能です。IEA(国際エネルギー機関:日本も加盟)は、2040年には新設発電の50%を再生エネルギーが占めるようになると発表しています。原発はもはや過去の発電方式です。再生可能エネルギーの比率目標を低くし、原発比率を20%以上として維持しようとする日本の方針は、持続可能な社会を求める世界のトレンドに逆行しています。「NO NUKES MAGAZINE」vol.4では、危険極まりない原発から一刻も早く脱却し、新しいエネルギーへのシフトの有効性について紹介しています。

NONUKES MAGAZINE vol.04

ノーニュークスマガジン

2015年6月1日発行



エネルギーシフト 編

NONUKES! エネルギーシフトの加速で原発不要!
Energy Autonomy!

